救　急　医　学

科目責任者　和　氣　晃　司
学年　６学年

Ⅰ．前　　文

既に，４学年において26回の救急医学の講義が行われている。しかし，その後に臨床実習を行っており，その経験をもとに知識の整理や再確認を行うことは有意義である。各専門診療科に分散している知識を統合し，より深く理解することが求められる。

Ⅱ．担当教員

救急医学　　（和　氣　晃　司）

Ⅲ．学修の到達目標

救急診療に必要な知識，技術を診療科の枠を超えて統合，理解する。

Ⅳ．求められる事前学習，事後学習およびそれに必要な時間

事前学習：４年次の救急医学の講義資料を確認しておく（60分程度）
事後学習：講義資料を見直す。(40分程度)

Ⅴ．授業計画及び方法　＊（　）内はアクティブラーニングの番号と種類

（１：反転授業形式（事前学習用動画等の教材を前もって配付する。原則として授業中に事前学習の内容に関する小テストを行い知識の確認を行う。）
２：ディスカッション，ディベート　３：グループワーク　４：実習，フィールドワーク　５：プレゼンテーション
６：その他）

回数	月	日	曜日	時限	講　義　テ　ー　マ	担　当　者	アクティブラーニング
1	7	24	月	7	心肺蘇生・救急医薬品	救急医学 菊地　研	1
2		27	木	2	救急医学総論，外傷，災害医学	救急医学 和氣晃司	1
3		27	木	3	熱傷，意識障害と失神	救急医学 菊池　仁	1
4		27	木	4	中毒，環境障害	救急医学 内田雅俊	1

Ⅵ．評価基準（成績評価の方法・基準）

出席状況と定期試験の成績から判定する。

Ⅶ．医師国家試験出題基準（平成30年版）における区分

必修-11-B-①～⑦
総論（Ⅰ保険医療論）-６-E-①～⑥，-６-F-①～⑤
必修-11-D-①～②
総論（Ⅶ診察）１-B-⑭，総論（Ⅸ治療）10-D-①～⑫
総論（Ⅵ症候）１-E・４-H
総論（Ⅸ治療）10-F-①～⑤
必修-11-C-⑱，各論（ⅩⅢ生活環境因子・職業性因子による疾患）２-B-①～⑥・４-A-①～⑤

六学年

各論（XⅢ生活環境因子・職業性因子による疾患）5-A-①～②

Ⅷ. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

試験の正答は救急医学講座医局前に提示します。質疑は連絡先とともに紙に記載し，正答記載紙横のホルダーに入れて下さい。

Ⅸ. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目の関連

＊◎：最も重点を置く DP　　○：重点を置く DP

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）		
医学知識	人体の構造と機能，種々の疾患の原因や病態などに関する正しい知識に基づいて臨床推論を行い，他者に説明することができる。	
	種々の疾患の診断や治療，予防について原理や特徴を含めて理解し，他者に説明することができる。	◎
臨床能力	卒後臨床研修において求められる診療技能を身に付け，正しく実践することができる。	○
	医療安全や感染防止に配慮した診療を実践することができる。	
プロフェッショナリズム	医師としての良識と倫理観を身に付け，患者やその家族に対して誠意と思いやりのある医療を実践することができる。	
	医師としてのコミュニケーション能力と協調性を身に付け，患者やその家族，あるいは他の医療従事者と適切な人間関係を構築することができる。	
能動的学修能力	医師としての内発的モチベーションに基づいて自己研鑽や生涯学修に努めることができる。	
	書籍や種々の資料，情報通信技術〈ICT〉などの利用法を理解し，自らの学修に活用することができる。	
リサーチ・マインド	最新の医学情報や医療技術に関心を持ち，専門的議論に参加することができる。	
	自らも医学や医療の進歩に寄与しようとする意欲を持ち，実践することができる。	
社会的視野	保健医療行政の動向や医師に対する社会ニーズを理解し，自らの行動に反映させることができる。	
	医学や医療をグローバルな視点で捉える国際性を身に付け，自らの行動に反映させることができる。	
人間性	医師に求められる幅広い教養を身に付け，他者との関係においてそれを活かすことができる。	
	多様な価値観に対応できる豊かな人間性を身に付け，他者との関係においてそれを活かすことができる。	